〔わたしと美術館〕

漆工品修理報告

北村謙一

美術館の働きの中でも、美術品の保存は展覧会の開催とならぶ最も重要な任務です。しかし美術品の修理には非常に高度な技術が必要ですので、私どもの手に負える仕事ではありません。そこで、修理が必要と認められる場合には、信頼できる技術者に依頼することになります。この度は、漆芸家の北村謙一氏に館蔵の漆工品を修理して頂きました。

北村謙一氏は、漆芸制作及び文化財修理技術者として、多数の国宝、重要文化財指定の工芸品の修理に当たられ、また、欧州各地で漆芸について御講演をなさるなど、幅広い活動をしておられます。

ここに、北村謙一氏の御快諾を得、金貝蒔絵鳳凰唐草文鏡巣、沃懸地螺鈿蒔絵菊文香合、朱黒漆耳盃の3件に関する修理報告書を掲載させて頂きます。　(中部義隆)

金貝蒔絵鳳凰唐草文鏡巣

鎌倉時代　高 2.5cm　径 10.0cm

(現状)

蓋、身ともに甲板、底板の反りによって側面に縦方向に大きな断文ができており、蓋と身の合口は一方向でしか合わなくなっている。また、置口は腐食と素地の変形から、身の上端で置口との間に大きな隙間ができていて、置口と離れる恐れがあった。(図1、2)

(修理仕様)

断文の箇所に生漆を十分に注入し、漆が乾いた後に刻苧で(生漆と小麦粉、糊を良く練った麦漆に麻の繊維と木粉を混合したもの)隙間を埋めた。さらに、下地漆で表面を整え、拭漆をして置口の色と調和するように仕上げた。(図3、4)

沃懸地螺鈿蒔絵菊文香合

鎌倉時代　高 5.6cm　幅 5.2cm

図1 修理前

図3 修理後

図2 修理前

図4 修理後

図5 修理前

図7 修理後

図6 修理前

図8 修理後

(品質形状)

檜材と思われる目のつんだ針葉樹で、蓋髪から身の側面にかけて胴張りに削り出し、縦木目の別材を四隅の内側に貼って補強し、角丸に成形し、甲盛り塵居を取った蓋と、底板を貼る。

外側には、全体に麻布を着せた上に菊文様の透彫の螺鈿(0.5ミリ厚の夜光貝)を貼り、貝の厚みに下地を付ける。下地を磨いた後、黒漆を一回塗り、金丸粉を蒔きつめて沃懸地に仕上げる。蓋と身につながって貼られた菊の丸文は、中央部分で切断された巾だけ小さくなっている事から、螺鈿を貼った後に、身と蓋に同時に下地を施し、後から身と蓋を切り離したものと思われる。

内側は切り離した後に、それぞれ薄い下地を付け、黒漆を一回塗って、研出蒔絵に仕上げている。(図5、6)

(修理仕様)

身の置口を外し、漆の浮き上がった箇所や断文に生漆を十分に注入して補強した。身の螺鈿の欠失した所に新しく螺鈿を補い、下地で整えた後、一回黒漆を塗り、菊文様の透しの内側に金粉を蒔いて沃懸地仕上げとした。また、内側の漆の欠失した所は下地で整え黒漆を塗った。

置口は麦漆で接着し、隙間には刻苧を埋め下地漆で表面を整え、拭漆をして、置口の色と調和するように仕上げた。(図7、8)

朱黒漆耳盃

漢時代　楽郎出土　元馬紵牢銘

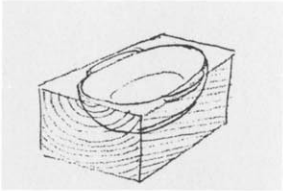
高 4.0cm　径 10.0cm

(品質形状)

広葉樹の一木を耳付の長楕円形に刳り出していて、木目の方から、木裏(木材の中心)を上にして刳り出している。(図9)

耳盃の底部から上端にかけて、やや薄手に肉取りし、厚い所で3.5ミリ、薄い所で1.0ミリ程度である。

図9



素地全体に平織のかなり目のつんだ麻布を着せ、薄く下地を施して、黒漆を二回程塗り、内側の立上がり部分には、弁柄朱と思われるやや赤褐色の漆を塗る。

また、見込み底部中央の縦方向に肉持ちの良い朱漆で元馬陜紵牢の銘文を書く。(図10、11、12)

(修理仕様)

大きく三つに割れて和紙で仮貼りしてつないであったものを、和紙を水で湿らせ静かに外した。それぞれの接合部に過去の修理の際に付着していた膠を取り除き、それぞれの部分の割れ目の中に生漆を十分に浸透させて、割れ目の周辺を補強した。

その後、割れ目の空洞部分に刻苧を充塡し、十分に乾かせ、それぞれの部分を接合した。この時、銘文の文字がつながるように注意した。

接合部の欠失箇所を刻苧で補いさらに下地漆で面を整え類似の著色(弁柄・松墨)をした後、生漆を拭き込んで仕上げた。

(図13、14、15)

北村謙一氏（きたむら けんいち）昭和13年1月15日、奈良県の三代にわたる漆芸の家に生まる。昭和35年東京芸術大学美術学部工芸科漆芸専攻を卒業。その後、漆芸制作及び数々の国宝、重要文化財指定品の修理に当たる。第二七回日本工芸展にて最高賞、第五回日本伝統漆芸展にて日本工芸会賞を授賞。

図10 修理前

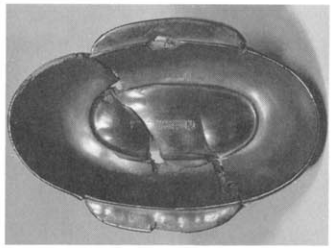


図11 修理前

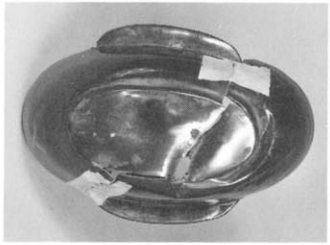


図12 修理前

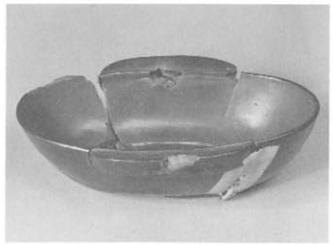


図13 修理後

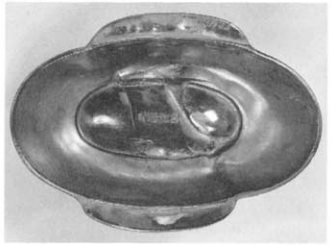


図14 修理後

図15 修理後

季刊 美のたより No.90
平成２年３月３日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.